

# 12 貴族が流された国伊豆

～承和の変と応天門の変～

律令制度の律には、笞・杖・徒・流・死の5種類の刑罰が定められており、これを五刑という。そのうち流刑とは、都から遠く離れた配所に送られ一定期間労役に服するものであった。さらに罪の軽重により遠流・中流・近流の3種に分かれ、伊豆国は安房・常陸・佐渡・隠岐・土佐とともに遠流の国とされた。奈良時代から平安時代にかけて、伊豆には多数の政争に敗れた貴族たちが流されている。貴族が流刑にされた事件のなかでも、藤原氏北家が台頭していく9世紀に起こった承和の変と応天門の変は、ともに静岡県とのかかわりが深い。

〔史料1〕  
罪人橘逸勢、除本姓、賜非人姓、流於伊豆国、  
伴健岑流於隱岐国、  
〔静岡県史〕資料編4古代 24頁

## 1 橘逸勢の死

承和の変とは、842(承和9)年に伴健岑と橘逸勢らが、皇太子恒貞親王を奉じて東国で反乱を起こすという謀反を企てたとされる事件である。逸勢は嵯峨天皇・空海とともに後世三筆とよばれ、平安時代初期の能書家として名高い。この事件は、藤原良房が甥の道康親王(のちの文徳天皇)を皇太子にするためにしくんだ陰謀とみられ、藤原氏が他氏排斥のため企てた最初の事件とされている。〔史料1〕(『続日本後紀』承和9年7月28日条)のとおり、逸勢は本姓を奪われ非人と改められて伊豆国への流罪、健岑は隠岐国への流罪に処

せられた。

ところが〔史料2〕(『日本文徳天皇実録』嘉祥3年5月15日条)によれば、逸勢は伊豆へ送られる途中、遠江国板築駅で死去し、この地に葬られたのである。板築駅の所在地を浜松市北区

〔史料2〕  
追贈流人橘朝臣逸勢正五位下、詔下遠江国、  
郷一、逸勢者、右中弁從四位下入居之子也、  
拘細節、尤妙隸書、宮門榜題、手迹見在、  
延曆之季、隨聘唐使入唐、々中文字、呼為橘秀才、  
歸來之日、歷事數官、以年老羸病、  
靜居不仕、承和九年、  
染伴健岑謀反事、  
拷掠不服、  
減死配流伊豆国、  
初逸勢之赴配所也、  
有二女、  
悲泣歩從、  
官兵監送者、  
叱之令去、  
女昼止夜行、  
遂得相從、  
逸勢行到遠江国板築駅、  
終于逆旅、  
女攀号尽哀、  
便葬駅下、  
廬于喪前、  
守屍不<sub>レ</sub>去、  
乃落髮為尼、  
自名妙沖、  
為父誓念、  
晝夜苦至、  
行旅過者、  
為之流涕、  
及詔歸葬、  
女尼負屍還京、  
時人異之、  
稱為孝女、  
〔静岡県史〕資料編4古代 254頁

三ヶ日町日比沢付近に比定する説がある。また一方、板築駅の「駅」とは駅家のことではなく漢文流の表現をしたものであり、罪人の輸送は伝馬を使うのが原則であったことから、宿舎として利用したのは郡の役所である郡家(郡衙)であったとする指摘もある。これに基づき袋井市に伝わる伝承を手がかりに、逸勢が亡くなった地を山名郡家の所在地と推定される袋井市上山梨に求める説が唱えられている。

その後冤罪が晴れたためか、850(嘉祥3)年、逸勢に正五位下が追贈され、遠江国に

命じて遺骸を本郷の京へ改葬させている。また、逸勢の娘は制止を振り切って伊豆へ向かう逸勢のあとを追い、没後も埋葬された地にとどまって墓所を守り尼となって妙沖と名乗ったことから、

帰京後孝女とたたえられた。『日本文徳天皇実録』 斉衡元年（854）7月26日条の記事で遠江国の  
剽田7町を与えられた尼妙長とは逸勢の娘妙沖のことと推定されている。なお、周智郡森町橋  
はこの与えられた土地に由来する地名とみる説もある。

## 2 伴善男の配流

応天門の変とは、866（貞観8）年に大納言伴善男が朝堂院の正門である応天門に放火し、  
その罪を左大臣源信に着せて失脚をはかったが発覚し、古くからの名族であった伴氏と紀氏  
が没落させられた事件である。なお、伴氏とはかつての有力豪族であった大伴氏が弘仁14（823）  
年に淳和天皇の諱大伴親王を避けて名を改めたものである。ことの真相は定かではなく、政界  
の複雑な様相が絡んでいたようである。この事件をたくみに利用したのは藤原良房であり、事件  
の処理中正式に臣下として最初の摂政に任じられた。〈史料3〉（『日  
本三代実録』貞観8年9月22日条）によれば、善男は伊豆国へ、共犯  
者とされた子息中庸は隠岐国へ配流され、その他多くの関係者も流刑  
になっている。応天門の変の顛末を描いた『伴大納言絵巻』は、平安  
時代末期の絵巻物を代表するものである。

善男が伊豆国へ流された後、配所での消息は伝えられないが、868  
年に死去した記録が残る。伊豆市吉奈の善名寺旧蔵の仏像背銘には、  
「伴氏二親生靈 善魚 善足」の文字が刻まれており、善魚と善足は  
善男の子とする説がある。また「石井系図」（『静岡県史』資料編4古  
代1117頁）によれば、善魚と善足は善男の子と記され、善魚の子孫  
が伊豆国の国司である大掾や掾になっていることがみえる。この2

つの史料は互いに信憑性を補うことから、善男の子孫が伊豆国へ土着して国衙に勤務する官人と  
なっていたことが推定される。伊豆には、その他にも不運な運命に翻弄された貴族の血が残さ  
れたことであろう。

〔史料3〕  
是日、大納言伴宿禰善男、右衛門佐伴宿禰中庸、  
同謀者、紀豊城・伴秋実・伴清繩等五人、坐  
焼「応天門」、当斬、詔降「死一等」、並処之  
遠流、「善男配伊豆国」、中庸隠岐国、豊城安  
房国、秋実壹岐島、淨繩佐渡国、〔後略〕  
〔静岡県史〕資料編4古代 285頁

## 3 流人となった頼朝

平安時代中期の摂関政治の頃になると、藤原氏北家の強大な勢力が確立されるに伴い、政争の  
犠牲者が伊豆へ流される例は少なくなっていく。さらに時代が下り武士が成長してくると、1156  
（保元元年）年に起こった保元の乱で弓の名手として奮戦した源為朝は伊豆大島に流された。  
次いで1159（平治元年）年の平治の乱に敗れた源頼朝も伊豆国へ配流され、この流人の拳兵に  
より伊豆から歴史の大きなうねりが起こっていくのである。

〈参考文献〉

『静岡県史』通史編1 原始・古代 第3編第1章第5節 他

『袋井市史』通史編 第3編第2章第5節

佐伯有清『伴善男』（吉川弘文館）